

室生犀星未発表書翰二十一通

—「感情」刊行の苦心—

藤 田 福 夫

此処に掲載する犀星の書翰二十一通はいずれも木下謙吉氏に宛てたもので、現に同氏のご所蔵にかかるものである。先年借覽させていただいたが、今回氏のご了承のもとに一般に公表させていただくことにした。

木下氏は萩原朔太郎と同じ前橋市の方で、現在は、歌誌「水甕」の最古参同人で同社の相談役である。早く大正三年八月、前橋で萩原朔太郎を先輩格として刊行された文学雑誌「侏儒」（命名朔太郎・こびとと読ませた・編集者河原侃二）の同人として活動され、その誌上に短歌作品を発表されている。去る三十九年歌集「うつし絵」が刊行され、往年の作品や、回想記も収められている。「侏儒」誌上には北原白秋、萩原朔太郎、山村暮鳥、前田夕暮らのほか犀星、村田多ん、尾山篤二郎ら金沢関係者の作があり、第六号には「遍路」「鈴蘭」などその頃の金沢文学誌の紹介批評文も見える。

木下謙吉氏と犀星との交渉は朔太郎と「侏儒」とを媒介にして始まったようであるが、木下氏は前橋出身であると同時に大正三年十

月以降東京在住であったことが犀星が氏に近づいた大きい契機となつたと思われる。しかし此処に掲載した番号五の書翰にも見えるように大正五年七月の時点で、二三度会つた程度の交わりであつたらしい。

犀星書翰の内容は、若いとは言え多少は金融の便宜を持ったサラリーマンの木下氏に定収入の無い犀星が経済的援助を乞うたものであるが、その依頼事情の説明によつて雑誌「感情」が困難な経済事情にあえぎつつ刊行されたことがよくうかがわれるのである。「感情」の復刻版の解題上「感情グループについて」で伊藤信吉氏は「……財政的にはどうにかやりくりがついていたらしく」と記されており、氏の文章ははるぐそのあと犀星の「泥雀の歌」の回想的叙述の引用になっている。この書翰群は伊藤氏の言われるやりくりの具体的な姿を示すものとして注目されるのである。

書翰の内容を概観すると、番号四のものは「感情」三号と同種の青い用紙に書かれていることが先ず興をひくが、その叙述は「感情」の刊行費が十二円（第三号は表紙とも十六ページ。……「泥雀

の歌」には三十二ページのものについて十六七円くらいと記されているのであったことや二百部つくっていたことが記されている。その支払のためには前橋の朔太郎から金を得る前に十円の金を必要としたが、その資金の融通を木下氏に依頼し、利子を払ってもよいという強い刊行への決意や、電報による返事を頼むごとき切迫した気持ちを示している。さらに番号五のものでは郵税などに必要な三、四円の融通も依頼しているので、如何に手もと不如意であったかがうかがわれる。注意すべきは番号四、五の書翰で木下氏の資金融通を朔太郎には秘密にしてくれるように重ねて記していることである。犀星、朔太郎間に如何なる契約があったかはわからないが、他からの資金融通により、朔太郎の心証を害することを非常に警戒している心づかいがうかがわれる。番号五のものは、四の書翰に対する返電が深夜二時に来て翌朝金を受けとったと言い、先に記したように郵税などの入費のためにさらに三、四円を融通してほしいと言うのである。その書中に見える「根本的に味方になってくださるためには」の表現は犀星らしい執拗な性格の一端がうかがわれて興味深い。番号十一では五年九月の「感情」休刊の責任を感じると言い、やはり資金難を訴えている。萩原が黙殺状態であるというのも注目に値し、直接刊行の責任者であった犀星の苦心の程が察せられる。番号十四の大正六年七月二十一日付のものは金沢千日町で書かれており、巻紙に毛筆で認められている。内容は父の病中であることを記し四円の借金を申込んでゐる。

「父老をどうすることも出来ずに僕は僕の良心に對し毎日ヒドイ苦しみやうをしてゐます……私のこの郷里の位置と急迫とを理解して下さい」

とあって困窮の模様切なるものがある。これに続いて番号十五のもの

のに「文章世界へ詩を送つて旅費をとつてかえりました」と言い「かへつても感情は出せませんでした」とあるのは「感情」が大正六年八月は休刊しているのと符節を合する。休刊した「感情」は九月号を出したが、十月号は犀星の父死去のため再帰沢し、多田不二が「編集の後に」を書いている。この頃木下氏は既に東京を去って神戸にあったが、犀星からの雑誌への支援依頼も前引番号十五の六年八月十三日付のものを最後に見られず、その後は「愛の詩集」「叙情小曲集」の頒布依頼が見られるだけである。番号十六の六年十二月三日付のものに「ザッ、は殆んど僕の計営になりました。」とあるのはこの時期では萩原や竹村の援助が続いていたとしても、或る程度独立した犀星個人の経営になったことを示すものであろう。また苦しみと共に刊行の喜びのあったことは番号七の詩的な文章がよくそれを物語っている。

これらを通じて「感情」草創期の、朔太郎も必ずしも十分には支援しなかった時期に當つて木下氏が同好の友として「寛大」な好意を寄せていられたことを知るのである。犀星書翰の大正初年のものは全集掲載が少く、殊に「感情」刊行の苦心に触れているものは朔太郎や多田不二、上野甚作宛のものに僅かに見られるのみである。此処に経済的苦心のあと顯著なものの多数を發表する機会を与えられた木下氏に謝意を表して解説の稿を結びたい。なお木下氏については諸氏の研究、解説類に触れられていない。先に氏の歌碑が前橋市に建設せられたが、犀星支援者の一人としての氏のためにもその竣工を祝いたい。

(一) 消印大五、七、十一。日本橋区北新堀八 山路方
木下謙二宛 府下田端巷六参 沢田方 室生犀星 はがき

僕は昨夜こんなさびしい田舎へ越してきました。要れば私の方から申出るのでしたが、とにかくありがたい。

僕は十五日まで在宅します。さきぶれがあれば無論おまちしますが、でない、いつも失礼ばかりしてゐます。いいところです。とうぶん外室はしないつもりです。

(一) 消印大五、七 日 不詳 宛名前に同じ
署名 犀

たいへんな雨でした。仕事がつつかり済むと、気の遠くなような寂しさをかんじました。この村へきてから永い事杯を手にしません。晩には持病の齒痛がやつて来ます。その前に前の宿近くまである医者へ通ふのです。もっと幸福にならなければならぬことを感じます。

(二) 消印大五、七、十七。宛名前に同じ。
田端一六三 沢田方 室生犀屋 往復はがきの返信

前橋からかへりましたか。大至急で、話がしたい。今夜きて下さい。田端停車場で下りて、下臺^{（マ）}になってゐます。八百熊といふ八百屋のとなりです。沢田喜右衛門方とたずねられたい。いろいろなことがききたい

(四) 大五、七、二十一。宛名前に同じ田端一六三 沢田方
室生犀屋 用箋薄青色……「感情」3号と同種のもの 封書

先日は失礼しました。萩から今日までに返事が来ません。おそろくもう覚つてしまったものと思ひます。で、今は、一日も猶豫してゐられないのです。で、同君へは僕からも言はないで此間お話した十六頁の雑誌を出したいと思ふのです。此の青い紙をつかつて十二円ばかり(二百)かかるのです。東京堂で、昨日しらべると約三十冊売れるらしいです。それで(一冊十四銭しかとれない)約四円ばかり

りとれるのです。その受取証を印刷やへ渡せば、八円あれば、急場に合ひます。むろん、八月号が出来れば、それをもって前橋へ行つて金をとつて来ます。僕が行けばむろん金はくれると思ひますので、利子のたつ金でもいいですが十円都合してくれませんか。これは、雑誌ができると同時に返済します。萩原に必らず払はせませう。僕のこの苦しい心持を認めてくれませんか。金額より、すこしかけてもいいが、できるならば全金額たのみます。出きるならば、電報をうって下さい。そして郵便で下さい。萩が心よく出します。とにかくザツシの出上るまで秘密にして早く刷りたいと思ひます。

謙兄
犀

(四) 大五、七、二十二。宛名前に同じ
用箋下際一部破却 室生犀屋 封書

電報は深夜の二時に僕の夢を破りました。うれしくて晩ねむられなかった。けさ、拝借の分落手しました。すぐに印刷の交渉をして今かへったところです。印刷費は十二円でした。それを東京堂の預書を置いて、とにかく払ひました。青い方の紙が一部について三銭かかるので得きました。白い奴をつかふと、ザツシがうすくて貧弱で、しかたなく青いのにしよと思ひます。今地方の読者十人に先月号の集金郵便を出しました。二円は集まります。[欠]三円とすこしは、校正の時に渡さなければ[欠]いのです。校正は二十九日です。それまでに僕は活動しますが、しかし、ザツシが出来上ると郵税も入ったりして、動きがとれなると大変です。どうせ返済する金であります。よそから融通して下すったこともううれしい限りです。しかし根本的に味方になってくださるには、どうしても、もう三四円なければならぬのです。必らずお返しします。萩原に命じててもやませます。しかし雑誌の出来上るまで秘密にしてをいて下さい。

僕は、印刷ヤから銀座の本屋を三軒あるきましたが、一冊も売れていませんでした。疲れて目がくらくらしてゐます。どうか、僕の心を感じて下さい。二度三度合つた兄に、手紙一本で僕の社会を、僕の出るところを、救つてくれたことは感謝します。僕は初めて兄を知り兄の苦しい善い微笑をかんじることを感じます。

田端にて 室生犀星

木下兄

金のことは一切手紙にしてください。

宿の奴が見ますから。

(六) 大五、七、二十七。宛名前に同じ。「京橋にて」とあり住所前に同じ。署名 犀。表裏とも赤インキ使用) はがき

今、校正をして日がくれました。あすも、やります。あすは早くします。多分宅でやります。おたのみしたものを明日の午前中に投函してくれませんか。他にいろいろな雑務があつて、頭が乱れてゐますが、たのみます。そをいふ、はこびになれば二十九日の晩か、卅日にできます。

(四) 大五、七、三十 宛名前に同じ

室生犀星

封書

けふの午後の五時に出来あがりました。それと同時に、活動を初め、パナマは風に吹かれて泥まみれに着物は帆のやうに濡れました。僕はそのときにもなほ幸福をかんじ、勇氣を出してとうとう仕事をやつてきました。ありがとう。

昨日萩が越后から便りをよこしてとうとう逃亡しました。僕は、それでみんなわかつたやうな気がして彼に 約六字分破損 もし旅中に作れるなら 一行微損 今私のかんじてゐる 約三字微損 幸福との心持が続いてゐるかぎりこんどの救助を報ひなければならぬ努力をし

ます。僕はいまへとへとです。明日まだ百部(出来ない分)をとりにゆき、活動しなければならぬのです。しかし今日よりラクです。別送しました。体さいはどんなものです。ハガキでもいいからしらしてください。

謙兄

(六) 大五、八、七 宛名前に同じ

署名 犀

はがき

萩原君は、妹のもりをしてゐるので、幸福でないと言つて来ました。そして僕から要求したものを承諾して来ました。しかし、避暑地かへらなければ、こちらがいくらあせても、しかたがないと思ふので、控へてゐるのです。らい月の準備は十六日のヨ定ですが、そのときに何とかしてくれることと信じますが、それまでがまんして下さい。僕は、むやみとくるしい心持であつて、それで何にかけないのです。このもようでゆけば、どこへかに行かなければならないと思つてゐます。尼のやうな心持です。

(六) 大五、八、二十四。宛名前に同じ

田端 一六三 沢田方 室生犀星

はがき

明日午前八時五分迄でまへし行きます。むろん、なんのたよりもないのです。凡ての解決をします。どうか、すこしの間がまんしてください。

午前 二十四日

(四) 大五、九、六 宛名前に同じ

田端 一六参 室生 犀

はがき

ところがきをなくしてしまつて、こまつた。山村君がこの卅日にやつて来ます。らい月の二日に。鴻の巣で会をやります。晩の六時。きてくれませんか。

雑誌は十月は出します。あなたへのことも来月はどうかしします。不快な気がしませうが、ゆるしてください。僕自身は、けつして、のんきでないし、そのことによつても苦しんでゐるだけでも、あなたがして下さつた厚意を報ひる形式がどんなに進んでゆくことを念つてゐるのですから。

(二) 大五、九、七 日本橋箱崎町四ノ一七号
奥山さま方 木下謙二宛。無署名 はがき

九月は休刊しました。僕が凡ての責任を負ひます。もう何も言ふことがありません。いましばらく、らい月の雑誌の資金をつくれるまで待つて下さい。申訳ありませんが、おたみします。室をかへりました。萩原兄は依然黙殺です。

(三) 大六、五、十五。神戸市平野下三条町二番四
宮永方 木下謙二宛 感情詩社スタンプ はがき

とうぶん帰らないんですね。離れて見ると、君の寛大に酷く気持ちが苦しくなる。神戸はいいと思ひますね。すっかりエキゾチックで、劇しい洋服の気らしい匂ひがしそうですね。僕はドストエフスキーのものを毎日よんでゐます。あの人は苦しみました。あの人のことを考へると私共は極楽ですね。からだをだいたいぢにない。

(三) 大六、五、十九。神戸市平野下三条町四
木下謙二宛 室生屋星 はがき

この間萩原の方へ行つてきました。前橋は、やはり静かで、初夏らしい景情をそへてゐました。だいたい長い間あひませんね。

田端の僕の庭もたいへんよくなり、たいへん青くなり、僕をよくそだててくれます。来月は旅のことをすこしかきました。

それから「月に吠える」をお求めでしたか。あれの製本してない刷本が私の方にあります。しかし、もう、お求めでせう。また東京へ

かへるようになさい。いま夏のさかり。

(四) 大六、七、二十一。神戸市平野下三条町
二巷四 木下謙二宛。
石川縣金沢市千日町貳 赤井方 室生屋星

封書、巻紙使用、毛筆

木下兄

健康なことと思ひます。僕は今不幸を得て此郷里の金沢に来て居ます。父老をどうすることも出来ずに僕は僕の良心に對し毎日ヒドイ苦しみやうをしてゐます。僕に四円の金を融通して下さい。僕はすぐに帰京したく思ひますから。そして僕は今何よりも此手紙を兄に送り兄を煩すことを恐れます。しかし私のこの郷里の位置と急迫とを理解して下さい。初め電報がきてやつて見ると父はヒドク症衰してゐました。けれども私はこれ以上ここに留つてゐることがもう堪えがたく苦しくなりました。帰京して仕事をして又兄に手紙を致ますまでどうか私に我慢して下さい。

僕はまだ一歩も町を歩かないのです。僕にはすぐかへることばかり考へてゐるのです。兄の救助の早いことを祈ります。

(五) 大六、八、十三。神戸市中山手通二丁目 長谷川方
木下謙二宛 感情詩社(スタンプ使用) 封書

文章世界へ詩を送つて旅費をとつてかへりました。かへつても感情は出せませんでした。去年の今ごろだつたかと思ひますね。苦しんでそれを兄に分つてもらつたのは、今は日氏のホ助もなく勇敢にやつて来たのでした。今長い十枚の詩をもつて又文章世界をその用途しに行くところです。

九月は出します。十六七日には印刷屋へ廻すのです。で、その費用のため色々苦しんで居ます。兄もいろいろ入るでせう。しかし私

をもう知つて下さった意味を私に永く記憶させて下さい できたな
れば十六七日から二十日ころに すこしお助して下さい 暑い日に
色色な面倒な苦悶を感じることは たへがたい重荷です

木下兄

犀

(未) 大六、十二、三。神戸市下平野三条町二丁目 ながき
木下謙二宛

すこし暖かくなりましたね。田端もだんだんよくなりました。河宗
はゐます。あの本は、持つてゐるやうです。『僕に問合せたらまだ
読んでゐるらしい』と云つて、すぐ返すようにお言ひなさい！ で、
だめなら、私から命令します！
ザツシ、はらい月余分に送ります。

ザツシ、は殆んど僕の計筈になりました。

幸福！ それは、私共の全体でないことをあなたは知つてゐるでせ
うね。たつしやで めて下さい！

(古) 大七、一、四。神戸市中山通二丁目 ながき
川方 木下謙二宛 感情詩社スタンプ はがき

木下兄 今愛の詩集三冊送りました どうかあれをご友人におわけ
下さい。そしてその方の収獲をお送り下さい。それをまします
いへんかかつて それでも いいものになつて喜んでゐる 兄もよ
ろこんでくれることと思つてゐる

(六) 大七、一、十九。神戸市中山手通二丁目 ながき
長谷川方 木下謙二宛 私製はがき

賀正(印刷) おてがみうれしく拝読 私今月すゑ結婚のため
千九百十八年元旦 帰省いたすべく兄の方に余部お送り申し上げし
詩集の方特に御送費煩はしたく存じ上候 いま
はただ苦しきままおたのみまで

東京市外田端百六十三

室生犀星

感情毎号附センにて立ちかへり申候

(五) 大七、五、十二。兵庫縣武庫郡芦屋字平田四二〇 ながき
ノ十六 木下謙二宛 東京市外田端一六参 室生犀星

御てがみ嬉しく拝受いたしました このごろ暫く自分の道をよく歩
けるやうな氣で くらして居ます ほんとに君と永くあはないやう
な氣がします つか会つてよくお話するときをまします

(三) 大七、七、七。宛名前に同じ。 封書
感情詩社スタンプ 用箋ザラ紙

木下謙二様

この夏の休みにおいでのせつ待ちます
僕はこの夏の終りまでに小曲集を出します 古い詩で兄もこのこと
を喜んでくれることと思ひます 兄の友人二三の人々をおさそひ下
さい 本はできると送ります

十六七日すぎに印刷着手します それまでに特に心配して下さい
う旧い厚意によつておたのみいたします

(三) 大七、八、十九。宛名前に同じ 封書
東京市外田端一六参 室生犀星

木下君

ご無沙汰して居ります いつかおしらせした小曲集はこの二十六
七日に出来上ります 私は三四冊お送りしたく思ひます 一つはデ
ケエトしたく あとは 兄の近い人におすすめてはしく思ひま
す いろいろなことで自分の上に多くの働きを認めなければなら
ない生活を笑はないで下さい

東京の暴動も止みました
ただあの中に潜む更(マッ)新的な人影(マッ)の少(マッ)さ
いながら「一つの意志」をまとめただけでした

健康を祈ります

二十日午后

犀

付記。萩原朔太郎の木下氏宛書翰は近く別稿として発表したい。

(金沢大学教育学部教授)

[受贈雑誌]

その三

- 淑徳国文 第十一号 愛知淑徳短期大学国文学会
人文学会紀要 第三号、別冊 国士館大学
親和国文 二、三、四 親和女子大学国語国文学会
滋賀大國文 七、八
樟蔭国文学 第八号 大阪樟蔭女子大学国文学会
女子大文学 国文篇 二十二 大阪女子大学

説林

専修国文

玉藻

東海学園国語国文

十四 愛知県立女子大学

三、四、九 専修大学国語国文学会

第六号 フェリス女学院大学国文学会

一、二 東海学園女子短期大学国語国文学会

同志社国文学 五・六(合併号) 同志社大学国文学会

同朋大学論集 二四、二五(合併) 同朋学会

同朋大報 二二、二三 同朋学会

東京女子大学日本文学 三四、三五(合併)

東横国文学 第二号 東横学園女子短期大学国文学会

名古屋大学国語国文学 二六、二七、二八

二松学舎大学論集(昭和四十四年度)

梅花女子大学文学部紀要(国語国文) 五

殖生野国文 第一号 四天王寺女子大学国文学会

広島文教女子大学研究紀要 四

福島大学教育学部論集 二二、二三

藤女子大学国文学雑誌 八、九、十 藤女子大学・短期大学

文学部紀要 一、二 中央大学学術研究会 国語国文学会

文芸と思想 第三四号 福岡女子大学文学部

宮城教育大学国語国文 一、二 宮城教育大学国語国文学会

目白学園女子短期大学研究紀要 六、七

山口女子短期大学研究報告 二五

立正大学国語国文 七 立正大学国語国文学会